

佛立開導日扇聖人物語 第9回



200th Anniversary
佛立開導日扇聖人◎生誕200年慶讃

松平頼該公《讃岐の国(香川県)の藩主・松平頼胤のお兄さん》は、とても熱心な御題目のご信者だったんだ。この頼該公と開導聖人は、「仏様のみ教えを正しくお伝えしたい」という点で、とても意見が合ったんだね。そこで、頼該公は香川県・高松に、開導聖人は京都に、それぞれ「本門佛立講」を開くことを約束したんだ。今回は「華洛」本門佛立講」のご開講のお話しをするね。

ご開講

安政四年(一八五七)一月十二日、開導聖人は四十一歳の時、とても寒さきびしい京都の町で『華洛』本門佛立講』をご開講(教えが開かれ、宗教・宗派が新たに生まれること)されたんだ。

この日、開導聖人が住んでいたご実家の大路家(現・誕生寺)にほど近い、新町蛸薬師下る西側の千切屋・谷川浅七さんの家に、数人のご信者が集まり、開導聖人みずからご染筆(筆で文字や絵を書くこと)された御本尊をおまつりし、御題目をお唱えし、御法門が説かれ、『本門佛立講』のご開講となったんだ。

このご開講に参詣したご信者方は、①千切屋というお店の店主・谷川浅七、②その奥さんの谷川シマ、③千切屋で働いていた宗助、④竹や町三長(三文しや長兵衛)の母の久の四人(六人との説もある)。谷川浅七さんは初代講元(中心となって世話をする役)となったんだよ。



「開講御本尊」
開導聖人がご開講にあたりご染筆された御本尊。



「本門佛立講」ご開講の様子

では、なぜ開導聖人は『本門佛立講』をご開講されたのか？

それは当時、お葬式やご回向ばかりを専門としていたり、全く人々に御題目を弘めようとしていない、そんなお坊さんや宗門のあり方に対して、開導聖人はとても疑問(うたがい問うこと)を持っておられたんだ。

そこで開導聖人は、現実に悩み苦しむ人や病氣の人々をお救いし、希望や勇気を与え、真の仏教者として「御題目を伝え弘め多くの方々をお助けしよう」と決意されたことが、『本門佛立講』のご開講の大きな理由となったんだね。

「華洛本門佛立講」のご開講図
「清風一代記略図」・御自画伝・扇全五巻二〇二頁



わずか数名で開講した「本門佛立講」。しかし、開導聖人は「後万人をもって数んず」と語られているんだ。将来に大きな夢を抱きながら、御題目を「お弘めするぞ!」との力強い意欲がとても伝わってくるね。ここに今日の本門佛立宗の原点がスタートしたんだよ。

開講聖地

この『本門佛立講』のご開講の地・旧谷川浅七さん宅跡も、長い間、人手に渡っていたんだけど昭和六十一年(一九八六)三月、宗門が無事に入手(手に入れること)することができたんだ。实にご開講から百三十年目のことだったんだよ。

この年の三月二十八日、この地を「開講聖地」とする奠定(定める)式が行われ、宗門による永世(限りのないながい年月)護持(大切にまもり保つこと)が誓われたんだね。

まさにこの開講聖地こそ、当宗の「ご弘通の原点」なんだ。皆も一度、この『開講聖地』にお参りしようね。



「開講聖地」
「みやこより 咲きはじめたる 法の花」の御教句碑が建つ。当宗の「ご弘通の原点」だ